

## 作庭実習「森をつくる」5

### 環境共生園 2005

鈴木 理恵<sup>1)</sup>・深町 和代<sup>2)</sup>・岩村 伸一<sup>1)</sup>

### Seminar in Garden Design “To Create a Forest” 5 Kyoseien 2005

Rie SUZUKI, Kazuyo HUKAMACHI and Shinichi IWAMURA

抄 録：京都教育大学の美術科で開講されている「作庭実習」は、作庭を通して森をつくるということをテーマにしている。参加者は、体を使って空間を変えることに取り組む。2005 年度は、附属環境教育実践センターの南にある環境共生園を、その舞台とした。ここでは、そこでの作業の実際を、日時を追って報告している。

キーワード：庭，森，作業，身体，環境

2005 年度の作庭実習は、京都教育大学附属環境教育実践センターの事業として取り組まれている環境共生園の造園作業を主な内容としている。15 名の受講生と教員、それに多くの OB の参加を得て、制作は進んだ。ここでは、その記録写真や作業日誌をもとにして、作業者の目を通して見た作業の実際を述べることにする。

10 月 13 日 図書館の森，手入れ

10 月 20 日 E 棟北の森，手入れ

10 月 27 日

共生園での作業初日ー環境共生園の説明と草刈り

雑草がもうもうと生い茂る広大な空き地。ここがこれからの作業現場だと言われてもピンと来ない。

今日は地形に手を入れるための準備段階。作業をしやすくするために、伸びたい放題の雑草たちを刈っていく。10 月も半ば、秋もたけなわ。しかしここには手強い蚊が生き残っている。雑草との格闘に夢中になっていると容赦なく血を奪っていく。そのしぶとさには腰からぶら下

---

1) 京都教育大学 2) 京都教育大学附属養護学校

げた蚊取り線香も役立たず。なんせ 90m × 25m の広大な敷地、刈っても刈っても背丈より高い雑草の壁が立ちだかっていたのだけれど、刈り払い機 3 台も投入し、人海戦術で草刈りを続けた結果、過去の作業が姿を現し出した。

寮の前の雑草に覆われた土地。環境センターに来るまでの間に目にしていたはずなのに、それとは意識していなかった。10 月もうすぐ終わるというのに、夏の勢いをまだまだ色濃く残す土地。ここが今日からの作業場である。

附属高校へと続く道路側から立ち入ろうと思えば、簡単に入ることができる。しかし、今日は農園側から小さな門をくぐってこの土地へと足を踏み入れた。外から見ると、まるで空き地のはずなのに、門というのは不思議なもので、内部からそれをくぐって入ると、何か特別な場所に入ったような気分になる。見る気がなくとも目に入ってくる緑と茶色、誰も呼んでいないのに近づいてくる蚊、半年人の手を離れていたのだという時間を含みもち、自然の力が好き放題やってのけたことが、見るだけで伝ってくるような場所だった。

見ているだけでは始まらない。これからの作業がしやすいよう、まずは地面を覆っている雑草を刈ってゆく。むっとする草と土のおいが鼻に入ってくる。夢中になって草を引く。どの草もなるべく根から引き抜くようにする。こうすることで、少しでも雑草の成長を遅くすることができる。根が長く、引き抜くことが難しいヌスビトハギや、しぶとく強い根を持ったハリエンジュなどはスコップを使って掘り起こす。共生園の先々のことを考えて、わたしたちの側も根気強く雑草たちと付き合い合うのだ。

とはいうものの、人の手だけではなかなか大変なものがある。南北に長く広い土地。北側の、昨年まで造園作業が行われていた部分では、人の手による草引きを進めるが、南側の、まだ手のつけられていない平らな空き地の部分は、刈り払い機の力を借りた。さすが機械、草を刈り飛ばす威力が大きい。

今日だけでは草刈りは終わらなかったが、少しずつ草の下に隠れていた地面の様子が見えてきた。

11 月 10 日

作業 2 回目ー草刈り・石運び

雑草についての古川三盛氏（作庭実習実技指導）のコメント



「雑草は、庭の成長のためには必要です。地面が乾くのを防いで、木などが根を張るのを助けるからです。だけれども、雑草の中でもヌスビトハギやハリエンジュなどはすごく強靱な根の張り方をするし、増殖力がすごいので、きちんと根絶やししておく必要があります。外来種のヨモギも繁殖力のしぶとさでは同様で、根から引っっこ抜いていきます。」

前回に引き続き、草刈りを進める。今日はその作業に加えて、石運びも行った。農園と共生園の間にある生垣の手入れもかねて、その下に転がっている石を少し移動させる。また、四方八方に散らばっている、まだ地面に据えられていない石も、数箇所へ寄せ集めた。

石には大きささまざまな大きさが、重さがある。小さいものならばひとりでかかえて運ぶことができるが、大きいものはそれ相応の人数が必要であるし、それでも無理なこともある。さらに、運ぶ石の数も一個や二個ではないので、いかに体に負担をかけず、無理のないようにして作業を進めるかが大切になる。ひとりでかかえて運ぶ場合、腰を落として、全身で石を持ち上げて運ぶようにする。そうしないと、すぐに疲れにみまわれ腰を痛めてしまう。また、持ち上げるのに重すぎる石は、体全体を使って転がしていく。それに加えて、ロープとかつぎ棒を使って、二人で石を運ぶことも習った。こんな簡単な道具で、かなり大きく重い石も運べることに驚き、おもしろくも思った。しかし、どれも単純そうな方法ではあるが、全身を使うこと、そして、どこにどう力を入れたらよいのかという身体（からだ）の使い方に慣れることは、なかなか大変だった。

また、石もいろいろなかたちをしているので、予想外の転がり方をするうえ、見た目と重さの違いに驚くことも多かった。耳からも石を感じた。石と石がぶつかり合うときの音は、乾いたような、湿ったような、不思議な音をしている。頭では鈍い音を想像していたのだが、どうもそれだけではなさそうな音だった。地面と石がぶつかり合うときには、やわらかな土の地面が石を受け止める、くぐもった音とともに足元に振動が伝わった。石の色やかたちを目にし、音を聞きながら、実際に手でその質感に触れ、運ぶことで重みを感じることは、石に出会うと同時に、自分たちの身体（からだ）にも出会ったように思った。

そうこうしているうちに、いつの間にか刈り取った草の山と石の集まりができあがっていた。そして、それらの向こう側には、昨年までに行われた造園作業一植えられた木々や、いくつかの石が組み合わされ据えられている石組み、ゆるやかな起伏のある野筋とよばれる地形の姿一が現れていた。



11 月 17 日

### 作業 3 回目－スコップの使い方

カチカチに固まった地面につるはしを入れ、ほぐしてやると、様々な物が出土する。タイルやコンクリート、ガラスの破片…。改築工事を出た残土を入れたためだそう。出土した不純物は、フェンス際の溝に埋めた。張り切ってスコップをガツガツ動かす人、妙にハイテンションで独り言を口走り続ける人、マイペースでのんびり構えた人、間に挟まれ作業にあぶれた人、うれしそうにつるはしを振るう人、感心する人、腰痛の人、人それぞれの取り組み方の違いが、単純な作業だったお陰で浮き彫りになっていておもしろかった。

草刈り・石運びが終わり、地表面が落ち着いたところで、いよいよ地形へと手を加えていく。今日は、つるはしとスコップを使った身体（からだ）の動かし方に慣れる手始めとして、消防学校側の少し段差のある地面を崩し、なだらかに整地する作業を試みる。

スコップに足をかけ、体重をうまく使って地面にスコップの剣先を突き刺す。てこのようにして土を掘りおこす。振り子のようにスコップにのっている土を放る。つるはしは、頭の上まで振り上げたあとは、それ自体の重みで地面に振り落とす。道具をどうからだで支え、どこで力を抜くのか、そのコツさえつかみ、慣れれば、もちろん疲労は伴うが、それほど難儀なことではない。

しかし、スコップやつるはしという道具自体に不慣れであり、予想外の土の固さ、土に混じっているごみや荒い石の多さも相まって、わたしたちは苦戦することとなった。

みな、スコップを手にし、横一列に並び、作業を始めたが、自身と目の前の土との格闘に夢中になり、周りが見えなくなってくる。だが、こういう時こそ周りへの注意を怠ってはいけないのである。スコップもつるはしも、鋭利な金属製の道具である。一步使い方を誤ったり、周りをよく確認せずに振り上げたりしたら、大惨事を招くこともあるのだ。各自の作業に集中しつつも、周りへの意識も忘れない。これができるかどうかによって、作業のしやすさ、そして楽しさが変わってくるのだと思う。

それほど長い時間の作業ではなかったが、からだがかぼかかとあたたまり、汗ばむほどであった。冬だからこそ、この程度で済むのかもしれないが、夏この作業をすることを想像しただけで疲れてしまいそうである。しかし実際の現場で働く人は、季節を選ぶことはできないので、わたしたちがここで行った作業は、体験のほんの一部にすぎないのだと思う。

11 月 24 日

### 作業 4 回目－石を据える

「石を据える」ということばを、この共生園での作業をはじめてから、よく耳にするようになった。だが、いまいち、どのようなことなのか分からない、日常では聞き慣れないことばである。石を「置く」ということだけではぐらついてしまう。かといって、「埋めて」しまっちは石の姿が見えなくなってしまう。どちらか一方の表現にとどまらない、安定していて、かつ石に大きさを感ずるような、もしかしたら、もっと広がりをもつような「据える」ということは、一体どういうことなのだろうか。



不安と期待が織り交じるような気持ちを抱えるなか、作業は進みだした。

参加人数が多いため、全員でひとつの石に関わるというかたちではなく、3～4人でグループをつくり、いくつかのグループでの作業となった。また、それぞれのグループには、作庭家・古川三盛氏、岩村先生、そして、古川氏のもとで仕事をしている先輩方がついてくれた。

石を据えていくにあたり、どのようなイメージを持ち、この共生園の地形に手を加えるかを皆が共有する必要がある。もしかしたら、花畑、亜熱帯の湿地帯、公園的造作など、人によって思い描く景観は違うかもしれない。それはそれとして、あってよいものだろう。しかし、作業は共同で行う。ひとつの方向を知らずして、ひとりひとりその道のりを楽しむこともできないだろう。

共生園の北から南へと水の流れをつくり、流れは南へ広がる池へとたどりつく。また、流れを軸に、その周辺にはゆるやかな起伏を持った里山の景観を展開させる。この造作の計画がすでにスタートしており、過去の作業がつくりあげた流れの上流部には山の中の溪流を髣髴とさせるような面影があるのだ。わたしたちの作業は、さらにそれを展開させるようなものになるはずだ。

しかし、一時に過去の作業とこれからの作業のイメージをつなぎ合わせるのは難しいし、それが大切なことというわけでもない気がする。それよりも、お天道様の下で、土を踏みしめながら、実際にからだを使って石を据えてみて、目の前で景観が変化していくことを、自身がその中に身をおいて体感するほうが大切で、おもしろいことなのではないだろうか。

大きく分けると、流れ自体を展開させるグループと、流れの周辺を展開させるグループとに分かれた。いずれのグループにおいても、まず、少し遠くから離れて地形を見ることから始まった。流れを軸に造作を考えるのだから、水がどう流れるか、あるいは、どう流したいかをイメージすることは必要である。そして、これが把握できたならば、どの辺りにどれぐらいの大きさ、どのようなかたちや色をした石がほしいか、グループの皆で意見を出し合い、実際に石を探して、据えたい場所に持ってきてみる。

石の向きを決める際、何か重要な決まりごとがあるのかとと思っていたが、特にそのようなこ

とはなさそうである。持ってきた石を流れの中に転がしてみたときの、偶然の向きであったり、石にあちこちさわり、いろいろな方向に動かして、ほとんど石と遊ぶような感覚の中で見つけた向きであったりして、その気軽さに驚いた。そしてさらに、意外とその向き以外の向きがない、ほかの向きにしてしまうと、どうも居心地が悪いというような思いもあるので不思議だった。気楽にできる分、楽しかったのだが、偶然のはずなのに必然であるかのような感覚が生まれてくることに戸惑う場面もあった。石をその向きで良いと判断する中に、人による好み・趣味もあるだろうけれど、流れという自然の力を再現するに至っては、自然の姿をよく見ていないとそうは判断できないと思うものもあった。水が流れたときに、どう石にぶつかり、石はどう削られるのかを知っていればこそ、この向きが自然であろうと判断できるのだと思う。そしてそれは、ひとつの石だけをみているのではなく、周りとの関係を見ている。ばらばらの石たちに、水が流れるという関係を見て組み合わせる。水が存在していなくとも、流れているように見えることがあるのは、石ひとつずつの格好だけを見るのではなくて、見えないものとの関係がさりげなくあらわされていることが伝わる時、そう見えるのかもしれない。

石の位置、向きが決まったら、それらを忘れぬよう石をそっと動かし、石の下の土を掘り下げる。それが済んだら、先ほどの石をそこに置き、ドンツキと呼ばれるひとかかえほどある丸太を両手で持ち上げ、石の上につき落とす。丸太の重みを利用して、石を地面に落ち着かせるのである。石と丸太がぶつかり合い、そのときに響く音が丸太の中を通して、空中に抜けていくような感覚、そして、石の下の土が、ぐっぐつとしまり、地中に沈む感触、それらが身体（からだ）にじかに伝わってきて、新鮮な気持ちになった。

石が土の上に落ちていたら、石の周りの土をつき棒と呼ばれる、手首ぐらいの太さの枝を使って、石と土の隙間に斜め方向から投げ込むようにしてつき固めていく。土ぎめという方法である。徐々に土も入れながら、丁寧に石を地面に固定していく。

最後に、石の周りの荒れた地面を、かき板と呼ばれる手のひら位の大きさの板きれを使って整地する。ここまできて、やっと地面に石が据わるのである。

目の前で作業が展開しているときは、そのほんの周囲のことしか目にしていない。しかし、一歩遠くに離れて、石とその周辺を眺めると、空間の感じが変わっていることに驚く。それなのに、その変わり方が空気のようにつかみどころがなくて、ほんやりとしてしまう。

据えた石と、その周りとの間に関係が生まれている。そして、わたしたちがそこに加わり、作業をしていたのだという時間を、からだの疲れと、気持ちの変化に感じ取る。目からは、なかった石がそこに据わっているのだと、その存在によって確認する。ひとつ石が据わると、その据わった石との関係でまた石が欲しくなってくる。

「石を据える」という作業の流れを体験し、そのことによって空間の感じが変わるおもしろさ、驚きに出会った日であった。

12月7日・8日

重機を用いた工事

ショベルカーが登場し、7日より大規模な整地工事が行われる。8日には、南側、池となる予定地の地面に、大きな窪みが現れた。人の力だけで行ったならば、幾日もかかってしまう大



きな作業を、重機はほんの数日で、平気な顔をしてやってのけてしまう。

12月8日

作業5回目ー再び、石を据える

機械に負けじと、わたしたちも石を据える作業を工事の傍らで進める。前回よりも作業を楽しんでいるように思う。グループで行う作業にも少しずつ慣れてきたようだ。

今日は、小流れの部分が大きく展開した。据えられていく石と石との間隔が、割合近いせいも、作業も次々と進む。勢いがある。ひとつ石を持ってきたときには、もう次に欲しい石が見えはじめているかのようである。不思議に思ったことは、石どうしの間隔が近いといっても、ぴたりと寄り添う据え方より、微妙な距離・空間があったほうがすっきりとする場面が多かったことである。石と石の間には何か空気のようなものがあるように思った。そして、その空気のようなものは周りにまで広がるようであり、同時にその場を引き締める、適度な緊張を持っているようでもあった。



目の前の作業の時間にどっぴりとつかり、楽しんでいたせいか、そこを離れて全体を眺めたときに、空間の感じの変わり様に驚かされることとなった。

流れの周辺の作業も、進んでいた。石と石との関係を慎重に確認しながら据えていく。それ



らの石の姿は、堂々としていて落ち着きを持っているように思えた。

流れに据えられた石たちの、遊んでいるかのような勢いのある姿と、その周辺の、流れに近づこうとするかのような、あるいは流れから遠ざかるかのような石たちの姿は、作業の時間の違いが現れ出ているようでおもしろかった。

12月15日

作業6回目ー整地・石据・小流れと支流の造作



今回も、数人ずつのグループに分かれて作業を進める。

重機による整地工事で荒れた地面を落ち着かせるため、今度は人の手によって整地をしていく。作業としては、工事によって出現した窪地の底の土をスコップで掘りおこし、一輪車にのせて、窪地の縁辺部へ持って行き、若干角々しく、穏やかでないその輪郭をなだらかなものにしていくことを行った。窪地に水がたまり、池の状態になったとき、水の中へと地面がごくゆ



るやかにもぐりこんでいくような姿になる想定だ。

工事跡はデコボコして、土が乾燥して固くなっており、ただでさえ使い慣れていない一輪車の操作を、より難しいものにした。たくさんの土をのせた一輪車を、姿勢をただし、ぐっと一歩押し出した途端、すぐに溝に引っかかってしまう。どうやら、この地面の状態で、ひとりで運ぶことは一苦労だと分かり、一輪車の前後に一人ずつついて、二人がかりで運ぶこととなった。スコップで掘りおこした土を、中心から縁辺へと運ぶ単純な作業。特に急ぐ必要はないのに、その動きの中に加わると、疲れを伴いつつも少しずつ作業は加速していくように思う。そして、自分の動作を思うようにさせてくれない状況に、妙な対抗意識のようなものが生まれて、さらにはからだは作業をやめられなくなってしまう。おかげで、寒い冬だというのに、上着一枚脱ぎたくなるほど汗をかき、身体は温まった。

整地作業をするグループから少し視線をそらすと、石を据えているグループが、流れの支流をつくっている。流れは、池となる窪地へと近づきはじめ、上流部の勢いのある姿から、中・下流部へ行くにつれ、穏やかな表情で石が据えられていくように思えた。また、川底には、ぐり石と呼ばれる握りこぶしぐらい、あるいはその半分ぐらいの大きさの石が入れられ、より川の流れのような趣が感じられるようになった。流れへと水を運ぶ役目をする支流は、見た目にはそれと分からないかもしれないが、消防学校側から水を集め、流れに合流するように設けられた。

皆、道具の使い方にも慣れてきたようで、かなり大きな石も、二人または四人で、ロープとかつぎ棒を使って運ぶことができるようになった。また、スコップの使い方においては、応用がきくようになった。この代わりにして石をちょっと傾けたり、土を掘る深さの基準にスコップを使ったりと、作業をしていく中で見聞きしたことを、必要に応じて使えるようになっていったように思う。人に教えられるのを待つのではなく、周りの人の動きを見て、そこから学び、自分で動いてみるのが大切なものかもしれない。

気がつけば、真新しかったはずの地下足袋は、ヌスピトハギの種をとところどころにひっつけて、どろだらけになっている。



1月12日

作業7回目－整地・石据・植物定植・坂東研究室参加



年が明けた。前回の作業からだいぶ時間が流れたせいか、共生園は、ひっそりと落ち着いていた。石たちは、もともとそこにあったかのように、据わっている。

この日は、整地・石据を進めるとともに、樹木の定植にもとりかかった。

自然にグループに分かれ、それぞれの作業を進める。整地をするグループは、消防学校側の丘と池とを、ゆるやかなつながりを持つように整える作業を行った。丘側の土は荒く、大きな石が混じっていて、かつ地面が固い。つるはしを振るう姿が多く見られた。

石を据えるグループは、流れが池へと流れ込む河口とその周辺へ石を据えた。この日はこれまでより、時間をかけて石を据えている。何度も何度も石の向きを変え、石自体も換え、納得のいくまでグループの皆と意見を交わし確認をかさねた。そうしたことによって、石を据えるという作業や、それによって変化した空間の感じが、より確かに、体に心に、手ごたえのようなものとして感じられたように思う。また、人との関係も変化したようにも感じられた。



木を植えるグループは、環境教育実践センターが近所の人からもらったプランター・植木鉢育ちの木々を、流れ、池の周辺へと定植していった。坂東研究室のメンバーは、午後からの参加となった。彼らが育てたドングリのポット苗を次々と定植していった。最後に、それらに水

をたっぷりやった。新たに木々が加わったことで、共生園は少し活気付いたように思われた。



1月19日

#### 作業8回目一木の定植

新たに購入した木々、8本、オトコヨウゾメ、アカシデ、ハシバミ、ガマズミ、アオダモ、エゴノキ、アブラチャン、サワフタギを定植する。今回は大きな木を定植することもあるが、作業に入る前にその方法について説明があった。前回、プランター・植木鉢育ちの小さな木々を定植したせい、作業のイメージが容易にできた。



木の定植の流れを追ってみる。まず、木の根の部分（鉢）を見て、根の大きさよりゆとりがあるくらいに幅を持たせた穴を掘る。同時に、鉢がうまりすぎないように、深さにも注意する。穴が掘り終わったら、木を穴の中に置いてみる。枝の向きや木の重心の安定など、木の位置が定まったならば、根と地面の間に空気が入らぬよう丁寧に土を入れていく。それに加えて、共生園南側の隅にたまった枯れ草や落ち葉が、良い腐葉土になっていたの、それらを一輪車とスコップを使って運び出し、肥料として土とともに混ぜ入れた。根が土で十分覆われたならば、周りの土を使って外周を盛り上げることで、木の幹を中心にして、落ち窪んだ円形の皿状のかたちをつくる。これを水鉢という。この水鉢の中に水を注ぎ入れ、土をより穴と根の間につめる。この方法は、水ぎめと呼ばれ、つき棒で土をつき固められない、このような木の定植の時

には有効である。水ぎめをすることで、土は穴の奥へと流れ落ちるので、また新たに土を入れてやる。次に、根の張っていない木を支えるため、竹とシュロ縄を使って支柱をする。それをしないと、風で木が倒れてしまうのだ。少ない本数の支柱で支えなければならないので、木の重心を見つけ、支柱の位置を考え決定するのは、難しく思った。最後に周囲を整地し、定植が完了する。



やはり、木にも石を据えたときのように、木と木の間、また周囲との間に関係が生まれるようだ。さらに、木は生長をするので、将来の姿も考えて定植する位置を決める必要がある。

この作業を通して、木の不思議な姿に出会ったように思う。定植する前の木々は、ある場所で育てられたものが、土から掘り起こされ、根が途中で断ち切られた状態になっている。そのため、根が水や養分を吸い上げる力は弱まっている。そこで、地上の枝葉も蒸散だけが活発になりすぎないように、根の力に合わせるように剪定しなければならない。そうやって地上と地中との釣り合いを保ってやらないと、木は枯れてしまうのだ。これまでは、地上に出ている枝ぶり、幹、葉などの部分しか木々の姿を見ていなかった。しかし、地下にも地上と変わらぬような姿が広がっているのかもしれないと想像すると、新鮮な驚きを覚えた。

この日は、木の定植と支柱作業のみで終わった。わずかではあるが、いつもよりゆっくと共生園を見渡す時間ができた。数日前に雨が降ったこともあり、窪地に水がたまり、池ができていた。





木々は定植され、支柱をしつらえられることで、この共生園での生長の時間を刻みだしたようだ。今はまだ、人の手によって、土に支えられているような状態かもしれないが、いずれは根が土をしっかり握り締めるようになり、鬱蒼とした枝葉を茂らせ、森の姿になるだろう。

夕刻より、古川三盛氏宅に作庭実習に参加している皆で集った。あたたかな囲炉裏をかこみ、自然の恵みに舌鼓をうった。庭の仕事は、現場の作業においても、日常生活においても、素材の生き生きとした姿を引き出すことなのかもしれない。



1月26日

作業最終回－仮仕上げ

2005年度最後の作業となる今日は、仮仕上げということで、地表面のごみやガラ（荒い石ころ、くず石）を取り除き、整地・掃除を主に行った。また、前回定植した木々のいくつかの

水鉢を、水はけのことを考え、三日月のような形へとつくりかえた。それから、流れの地形で気になる部分に土を加え、ととのえる作業も行った。

庭の仕事は、掃除に始まり掃除に終わるというのは本当だった。毎回、授業の終わりに整地・掃除はしていたが、作庭実習全体を振り返っても、始めに、草刈りという掃除があり、最後もごみを拾う掃除で終わった。

しかし、これは仮の終わり、区切りのようなものだと思う。整地・掃除の傍ら、何人かで石を据えたのだが、最後の日だからまとめようと思いつりかかったのに、それは終わるところか、次の課題をその場に残すこととなった。まだまだやり足りない思いがあった。これらは次の作業者に引き継がれる。

目の前に広がる共生園の姿は、雑草が生い茂った姿から、大きく変化している。しかし、その最初の姿や変化の様子などは、はっきりとは覚えていない。作庭作業には、わけもわからず、夢中で取り組んだように思われる。頭が記憶していることは曖昧だと思う。だが、土のにおいや踏みしめた感触、手触り、動きなど、からだが体験したことは、不思議なくらい覚えている。何かの拍子にすぐに思い出せるような記憶なのだ。

今、ただそこに、目の前に、共生園がある。わたしたちが行った作業があり、それより前の作業もある。それらは全体として目に見えるものとして姿を現しているが、その内側には、作業をしたひとりひとりしかわからないような思い、秘密があるように思う。

足元を見ると、もううっすらと雑草が生えてきている。共生園の変化は終わっていない。しばらく放置された後、次に手を入れるときには、また呆然と雑草の群れの前に立ち尽くすのだろう。共生園が、幾度となくこれらの自然の成長と人による手入れを繰り返し、人の手から手



へと伝えられ、そこにあることが不自然なくらい自然な森となってくれたらいいと思う。そしてまた、わたしたちに、人を、空間を、土や木や石といったものを、さらにわたしたち自身を  
 出会わせ、わたしたちを変化させてくれる不思議な場をひらいていてくれたらと思う。



2005 年度参加者

深町和代 小畑朱 辻川麻里 中川舞衣子 坂東亜美 山本真理子 増山泉 高野薫  
 鈴木理恵 秋山はるか 中西絵里 南野詩恵 大平和弘 渡邊優 相模美優紀  
 島津麻衣子 青木久里 大石麻美子 松井亜子 松本崇司 渡邊菜美子 海野香奈 小西星美  
 宅間光晴 増井友香 小西拓哉 真鍋佑介 山本華菜子 片岡健助 安田孝一 山内朋樹  
 エマニュエル・マレス 竹島幸代 上野稔 古川三盛 坂東忠司 岩村伸一

